

「役に立つ」情報提供機関へのプロデュース ～公共図書館の変身によるアピールと利用拡大策～

H. 18. 10. 13

鳥取県自治研修所

齋藤明彦

1. 鳥取県立が変化した（しなければならなかった）理由（この章は手短かに）

ア平成13年度の二つのショック

イ公共図書館を取り巻く状況

・向かい風・・財政の急速な悪化

16地財ショック（16年度地方財政計画による地方財政の転換）

単なる税収不足による地方財政悪化ではない

迫りくる「**財政再建団体の恐怖**」

委託・指定管理者制度

「全面否定」する気はない～選択の問題

・追い風・・他の施設にはない風が吹いている。この理解と活用

地方分権＝自己責任の時代

子どもの読書・読解力への関心の高まりとブックスタートから始まるシステム

自治体の財政難によるハード事業（公共事業、箱物）の縮小

文字活字法

文部科学省の動き～「これからの図書館像」など

ウ地域における情報提供機関としての図書館の重要性の増大

～この考えを職員が共有することが公立図書館を変える

～これを理解・実践することが図書館プロデュース戦略の第一歩

地方分権＝自己責任～自己判断～情報の収集と分析

情報の不足＝リスクの増大

竹刀を持たないで剣道の試合をするようなもの

大学、試験研究機関、シンクタンク、その他の情報提供機関、とくに書店の差

十分な情報提供のできる良い図書館がなければ、地方分権＝自己責任に耐えられない

だから周辺にこそ良い図書館が必要なのに現実逆

「役に立つ、役に立つと認めてもらえる図書館」

「教育機関の枠を超えた情報提供機関」

あらゆる情報をワンストップで提供する

情報を活用できる人を育てる

図書館の持つ資産を最大限活用して、地域に貢献する

エ「図書館＝趣味的」というイメージの危険性＝対行政（予算、定数）では致命傷にも

～公立図書館関係者は気づいていない。だからいつまでも押され続ける

実際に多くの人が思っていること＝趣味的、娯楽、子どもの本、高齢者の余暇

利用など

～その機能を否定はしないが、このイメージだけだと非常に危険

家計を考えれば当たり前

このイメージの急速な転換がなければ、縮小か指定管理者制度の適用は免れない

その転換のためには・・新しい「役に立つ」事業の集中的展開

・・地域住民、行政へのアピール

2. 新しい取り組みへのチャレンジ（事業展開の根幹となる理論）

～その基本となる考え方、図書館の力を最大限に生かす

事業の取り組みの基礎となる考え方「CUBE」

（資料：新たな可能性を求めて～「CUBE」という考え方、県立図書館は今）

自館の強さと弱さ（売りになることと不足していること）を把握し協力者とWINWINの関係を作る（そのこと自体がアピールにもなる）

（資料：図書館の資産と不足）

図書館の最大の特性は**あらゆる情報が提供可能**

情報提供という点であらゆる団体等と30+30=150の関係が作れる

（互いの弱点を相手が補ってくれ、単独より効果が上がる）

3. 新しく展開した事業

鳥取県立図書館での事業展開（資料：鳥取県立図書館の新展開、県立図書館の改革試算）

キーになった事例（時間がないので簡単に紹介。質問があればお話しします）

事例1 高校支援からの拡がり

事例2 ビジネス支援～田舎なりのやり方と8千円の要求

事例3 青少年図書をソロプチミストの寄付で始める

事例4 大学への支援、連携

4. 「役立ち」の認識のためのアピール（大学の場合はどうなのでしょう）

図書館が行う事業の成功は利用してもらえたところまでなら60点

非利用者・行政に訴えかけて（認識してもらって）100点

（資料：図書館を社会と行政にアピールする）

- ・ 図書館は公共施設の中で通常もっとも多くの住民が訪れ、利用者にきちんと対応することで図書館員は仕事の充実感を得られる。

しかし**図書館を利用しない住民の方がずっと多い。**

- ・ 財政が逼迫すれば、何を削るかが議論になるが、**行政でも家庭でも「趣味的なもの」は真っ先に削られる**

- ・ **利用しない住民と行政がどのように図書館を見ているか、逆に言えば彼らへのアピールが図書館の命運を握っている**（彼らが図書館は趣味的なものだから削ろうと言いつつおしまい～例：資料費ゼロの提案）

5. 多くの公立図書館に共通する弱点（一部は再確認）

①非利用者の理解と彼らへの働きかけ・・・財政が逼迫するとこれが大切になる（前述）
様々な経営資源や協力者を使いこなしてコストパフォーマンスの良い事業を展開する

②マネージメント力（館長だけではない。職員全員に必要）

7つの視点（私のやっていたこと・・・参考ですので説明はしません）

遠近両方で見ると

目標、目指す成果は何かできるだけ明確にする

コストパフォーマンスを徹底的に考える（特に人手）

利用できる状況、人、機関を探す

周知する（職員、行政、利用者、マスコミ）

どこまで行ったら成功かあらかじめ設定する（100点は無理）

どうなったら撤退するかあらかじめ設定する（成果が上がりそうに無ければさっさと撤退する）

③プロデュース力

④PR力

⑤そうしたものの結果としての予算獲得力（資料：予算の獲得と行政との交渉～今回無）

6. **何より大切なものは、職員自身のモチベーション**

モチベーションの低い状態での改革は必ず失敗する

新しい事業を展開していくうちに上げていくことは可能

司書はプロになってほしい～得意分野の考え方

行政の動向、考え方を把握

行政職は、図書館の本来の力とおもしろさを理解（納得）してほしい

モチベーションを上げることは館長の最大の任務

・あらゆる場面を利用する

・知事、マスコミ、ミニコミ、LANなど、何でも使う

・情報をオープンにし共有、話し合う機会の拡大

・方向性を示し、それをやった場合とやらない場合の見込みを明らかにする

・人の無駄遣いをしない工夫

・館長が戦う姿勢を見せる等々

でも、職員にだって自分が皆のモチベーションを上げようという意識が必要

今日の講座では、時間の都合上かなり圧縮してお話ししています。

従って、本来ならば実例などをじっくり話して得心いただくようなことも省略している部分があります。

この時間内で話せることは限られています。どうぞ質問してください。

あとでメールをいただいてもお答えします（saitoua@pref.tottori.jp）